

一般社団法人 薬学教育協議会

平成 29 年度実務実習の良い事例集 (項目別)

— 施設について —

(平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日)

目 次

薬局実習

在宅医療	3
地域医療・セルフメディケーション	5
協力薬局	7
継続的な担当	9
連携	9
他職種との関わり	10
服薬指導	11
指導体制および実習環境	12
報告会・発表会の実施	15
患者とのコミュニケーション	16
僻地医療	17
その他	17

病院実習

チーム医療	18
継続的な担当	20
病棟業務	21
服薬指導	23
地域医療	23
連携	23
グループ実習	24
指導体制および実習環境	25
報告会・発表会の実施	29
患者とのコミュニケーション	30
僻地医療	30
その他	31

凡 例

- ◇ 大学側から見た良い事例を集めました。
- ◇ 大学名：非公開
- ◇ 記載事項：
 - 区分：病院、薬局
 - よい実習を行った各施設の特徴（見出し）
 - 具体的な説明（概要）及びまとめ
- ◇ 実務実習実施日程（原則）
 - 第Ⅰ期：平成 29 年 5 月 8 日（月）～7 月 23 日（日）
 - 第Ⅱ期：平成 29 年 9 月 4 日（月）～11 月 19 日（日）
 - 第Ⅲ期：平成 30 年 1 月 9 日（火）～3 月 26 日（月）

—在宅医療—

【在宅訪問と患者家族へのグリーフケアの実践】

在宅でがん緩和ケアを受けている患者さんの訪問指導に同行させてもらい、患者家族との触れ合いに温かさを感じた。訪問1週間後、患者さんが亡くなられた。

痛みがコントロールされ、にこやかに話されていた患者さんの死にショックを受けていたところ、患者家族の心の痛みはもっと大きいことを教えられた。

「落ち着いたら、一緒にお線香をあげに行きましょう！」と指導薬剤師に声掛けしてもらった。在宅医療に参画するという事は、患者家族のグリーフケアまで含むことを実感した。

【在宅医療】

在宅訪問に力を入れており、施設だけでなく個人宅への訪問の同行や服薬指導も数多く経験できる。薬局のある市川市の他、浦安市・船橋市の集合研修にも参加。

【在宅医療】

在宅医療に積極的に取り組んでいる。

【一人の在宅患者さんに深く関わりながら実習を行った例】

実習期間中、在宅患者を担当させていただき、週1回の訪問を繰り返した。その中で、薬物療法に深く関わり、多職種とも連携し、医師への処方内容の確認や提案を行った。実習生は、頻回に患者と関わることで、患者の想いを理解し考慮しながら患者にとって最適な治療を考える重要性を学ぶことができた。

【服薬指導および在宅業務体験を100件以上】

服薬指導や在宅業務は、実務実習でしか体験できないので、どんなレベルの学生でも、それぞれ100件以上の体験を心がけている。接遇が得意でない学生であったが、実習終了後の感想文に有意義な体験と成長について記載されていた。

【在宅医療の中でのチーム医療を体験できた事例】

在宅医療の実習が大変多く、実習初日から患家、施設などの様々な在宅医療の現場を体験することができた。医師の往診に同行し必要に応じて処方提案を行うなど、他職種との連携を見ることが出来、在宅医療の中でのチーム医療を体験できた。

在宅医療で他職種との連携の様子を見て経験することで、チーム医療の中での薬剤師の立ち位置や、在宅医療での薬物治療の考え方を学ぶことができた。

【数多くの在宅患者さんへの関わり】

実習第一週目からはほぼ毎日のように在宅医療に関わることでできる薬局である。在宅だけでなく幅広い診療科の処方せんの調剤も経験することができる。在宅IVHを実施している患者さんもおおり、無菌調製の経験も可能であることから、学生にとって大変充実した実習を受けることでできる薬局である。

様々な家庭への訪問に同行させて頂き、在宅医療は患者さんの生活を考えて行動を起こす必要があることを学び、そして患者さんの生活を多職種で支えるチーム医療・生活支援であることから、今後在宅医療の質を高めるためにもチーム力、多職種連携の重要性について理解を深めることができた。

【地域医療の現場体験を含む薬薬連携】

在宅患者へ訪問に実習生が同行する機会が多だけでなく、他職種との連携に参加する機会を設けている。

【在宅医療】

指導者と在宅医療目的で患者居宅へ訪問した。実習期間中に、同一宅へ複数回訪問することができ、患者と信頼関係を築くことができ、患者が抱える健康上の悩みについて真摯に対応できるようになった。

【在宅における看取り】

薬剤師、看護師、介護士などが「家族の希望により、施設内で看取り」をすることに対して、それぞれの職種が何をできるかを協議している場面に参加する機会を得た。

その中で「自分しかいないときに看取りをしても責任を感じなくていいよ。患者さんも患者さんの家族もここがいいところだからここを選んでくれているから。不安になったら皆で連絡取り合って、一人じゃないことをわかってほしい」といった、現実の言葉と向き合うことができ、在宅での看取りへの認識、さらには薬剤師としてできることは何なのかを真剣に考えることができた。

【在宅医療】

学生は、在宅医療における薬剤師の役割の知識が深く理解できた。

居宅内の服薬指導等の会話を通じて、服用状況が悪い場合の理由を探り、改善の対策を考える。また、訪問薬剤管理指導報告書の作成等を通じて、医師や多職種の連携の重要性を知る機会となった。

【地域医療の現場体験を含む薬薬連携】

在宅患者へ訪問に実習生が同行する機会が多だけでなく、他職種との連携に参加する機会を設けている。

—地域医療・セルフメディケーション—

【地域活動(中学生の職場体験学習のサポート)】

薬剤師志望の中学生が薬局に職場体験にきたので、情報センターでの模擬講演を基にしてくすりの正しい使い方を説明したり、模擬調剤をサポートしてもらいました。自分たちが教える立場になると意識が変わってきたようで、お互いの刺激になりよかったです。

【一人薬剤師勤務の薬局。処方箋調剤以外の薬局サービス提供の現場を体験できる貴重な実習施設であり実習環境の整った施設】

需要者の訴えをよく聴き OTC や漢方薬を提供し、地域住民の健康に関する身近な話題をテーマに地域住民向けセミナーを開催するなど、地域薬局に期待される役割を果たしている。

【地域包括ケアシステムにおける薬局薬剤師業務の体験】

グループホーム往診に同行。カンファレンス時の医師の処方説明と介護士から得た患者情報により処方の妥当性を判断。お薬手帳を活用した介護士への服薬指導内容等をまとめた「訪問時報告書」と「次回訪問時計画」の作成に関与できた。

【地域医療における薬剤師の主な業務内容と多職種連携を体験できる実習施設】

地域医療における薬剤師の主な業務を体験できるだけでなく、多職種連携のためのケアカンファレンスに参加することができ、薬剤師の役割や援助の方向性を学ぶことのできた実習施設。

【地域に根ざしたドラッグストア、健康支援活動や在宅・介護実習の充実】

地域に根ざしたドラッグストアで、健康支援のイベント、在宅・介護実習に参加した。名古屋の研修センターで多施設の実習を行うことができた。

【地域住民に向けたイベントへの参加】

介護フェアや防災訓練に地域の薬剤師会が参加して、地域住民の健康に関する身近な話題をテーマにブースの出店、セミナーの開催など、薬局に期待される役割を果たしている。

【在宅・学校薬剤師などの地域包括ケアにおける薬局業務への参画】

介護施設や老人ホーム、自宅への在宅業務、学校薬剤師・地域での薬剤師活動等の幅広い薬局業務に参画し、地域包括ケアにおける薬局の重要性を体感することができた。

【地域医療の現場体験を含む薬業連携】

複数の病院・薬局で地域医療に係る実習を行った。

【地域の健康サポートに積極的に取り組む薬局】

通常の保健調剤薬局業務に加えて、地域の健康サポートに積極的に取り組む薬局で、様々なテーマで健康フェアを実施しており、学生も中心的な役割を担わせていただき貴重な学習・経験ができています。(今回は、糖尿病予防の為に「美味しく楽しく適正な糖質を摂る」をテーマに低糖質パウンドケーキ作りに挑戦し、実際の健康フェアでその成果を披露した。)

【地域健康イベントへの参加】

地域で開催された健康イベントに参加し、骨密度、HbA1c の測定補助を行った。会場での健康相談なども見学する機会を得て、薬剤師の地域貢献の姿を見ることでセルフメディケーションの重要性や今後の薬剤師のあり方について深く学ぶことができた。

【地域連携による無菌調剤室の共同利用について】

近年、高齢化が急速に進み、有病率の上昇とともに、通院が困難な患者さんが増えている。そこで注目されるのが在宅医療であり、高カロリー輸液、モルヒネ注の混合調剤等には、無菌調剤室が必要になるが、設置や維持には莫大なコストがかかり、全ての薬局に無菌調剤室を設けるのは現実的ではない。北茨城薬局関南店は北茨城市や隣接する高萩地区の中のいくつかの薬局と連携を図り、無菌調剤室を共同利用している。今後増加が予想される在宅医療の在り方についての工夫を学べる良い機会となった。

【地域の健康増進イベントへの参画】

地域薬剤師会が主催する地域住民向けのイベントに参加することで、地域薬局、薬剤師が果たすべき責務について考える。

【かかりつけ薬局について深く考察できる実習施設】

服薬情報の一元的・継続的管理、24 時間対応・在宅対応、医療機関との連携、健康相談について体験し、地域に密着した医療を学生が実感できた実習施設。

【市民健康展への参加】

「薬物乱用ストップ」「生活習慣病」「セルフメディケーション」など病気とクスリに関する健康展に参加し、資料を用いて市民に説明する機会を得た。結果として、プレゼン能力やパンフレット作成のスキルだけでなく、コミュニケーション能力の向上も実感することができた。

【医事のお知らせの工夫をされている薬局】

薬局には“薬学 6 年生の薬学生が実習をしている”や“在宅服薬指導を行っている”とのポスター、“薬品 1,200 品目を備蓄している”、“ジェネリック医薬品の相談を受けている”、“水銀を使った体温計の回収をしている”などのお知らせが貼ってあり、地域の人に医事を知らせる工夫をされていた。

【地域医療の中で健康サポート薬局として機能】

- ・ 3 人の薬剤師はみなかかりつけ薬剤師。
- ・ 地域包括ケアシステムの一員として定期的に行政主催の会議に出席、学生も地域医療の問題点などを体験できていた。
- ・ 薬局間連携がうまくいっており特徴のある薬局に出向いての研修が計画的になされていた。

【ドラッグストア併設店の薬局。処方箋枚数も多く、実習環境の整った施設】

OTC 医薬品、介護用品、健康食品、美容製品など充実しており、セルフメディケーションについての知識を身につけることが出来る。また、様々な診療科の処方せんを調剤することができ、薬局内の雰囲気も良く、学生のモチベーションを高く維持できる実習環境である。

【OTC 医薬品の対応を多く実践させていただける施設】

処方せんの投薬・服薬指導での患者対応だけでなく、OTC 医薬品の相談や販売の実践の機会を多く与えていただいた。(OTC に関する患者対応の実践回数は 60 回)

【セルフメディケーションにおける薬剤師の役割について深く考察】

薬物療法と並行して、健康維持・増進を啓発することの重要性について考察し、薬局が提供できるセルフチェックの方法を考え、企画運営（健康チェック週間）まで体験できた実習施設。健康維持・増進のために、行動変容を促す効果的な方法を考察することができ、その難しさに関しても実感することができた。

【実習早期からのカウンター業務について】

31 年度からの新カリキュラムにおける実務実習に向けて、実習早期からのカウンター業務を経験することができる。毎日 1、2 症例ではあるが服薬指導を経験できるため、実習終了時には非常に多くの経験を積むことが出来る。皮膚科のクリニックが門前にあるものの、他の医療機関からの処方せんも多くくるため、様々な処方せんの調剤も経験することができる。

—協力薬局の充実—

【他の薬局店舗との実習連携】

定期的の他の店舗の見学、他の店舗での実習を行うことにより、「経験する範囲」が狭くならないよう工夫している。

【薬局チェーンでの合同研修、実習薬局外の見学】

会社（チェーン薬局）や各薬剤師会で学生への詳細な研修計画を作成しており、合同研修、セルフメディケーション、学校薬剤師業務、在宅医療業務、製薬メーカー見学、薬品卸業者見学など多岐にわたる実習が受けられた。

【他薬局での実習】

薬局は店舗により特徴や取り扱う処方内容が大きく変わるので、他店舗での薬局での実習は非常に勉強になったという意見が複数の学生から出された。

【地域の他の薬局との実習連携】

実習期間中に、他の薬局の薬剤師や他の薬局で実習している薬学生が集まり、症例報告や情報共有、ディスカッションをする機会があった。地域の薬局間で連携がとれており、安心して実習できた。他の薬局の実習生とディスカッションすることで、良い刺激を受けた。

【薬局の特徴を活かしたグループ実習】

調剤中心の薬局と OTC 等も幅広く取り扱っている薬局 1 週間ごとに同じ SBOs (スケジュール) で並行して交互に実習を行いつつ、服薬指導等の患者に触れる機会を多くとり、かつ、多数の医療・福祉・介護施設の見学も取り入れ、薬局ごとの特徴や地域医療における薬剤師の役割を十分に経験できた。

【地域保健への参画を視野に入れた薬局見学】

市街地から離れた高齢化率の高い地域に店舗を展開するチェーン薬局の見学を実習に組み込むことで、地域の現状を理解することや、その現状に合わせて薬剤師が果たすべき役割を考えさせる機会を提供いただいた。

【複数の薬局でそれぞれ特徴を活かした学習ができる施設 1】

D 病院前店では、在宅を教育し。また H 店では小児研修、耳鼻科領域の点耳について学ばせ。L 店では OTC の展示の工夫(空箱に音が鳴るようにして購入への工夫)や化粧品などの品揃えを学ばせる。

【複数の薬局でそれぞれ特徴を活かした学習ができる施設 2】

漢方薬はH店で、OTC は H 店で、在宅は C 店で実習を行い、学校薬剤師については指導薬剤師と学校に行き実地された。

【合同実習による DI・TDM 業務の深い理解】

会社(チェーン薬局)での合同実習において、薬局で実施している DI 業務や TDM 業務について意見交換や発表会など有意義な体験を通して、薬局における薬剤師の果たすべき役割について理解できた。

【薬局の特徴を活かしたグループ実習】

調剤中心の薬局と OTC 等も幅広く取り扱っている薬局 1 週間ごとに同じ SBOs (スケジュール) で並行して交互に実習を行いつつ、服薬指導等の患者に触れる機会を多くとり、かつ、多数の医療・福祉・介護施設の見学も取り入れ、薬局ごとの特徴や地域医療における薬剤師の役割を十分に経験できた。

【薬局以外の現場体験を含む実習】

複数の薬局が共同で卸会社での実習や共同講習会などを計画・実施している。

—継続的な担当—

【同じ患者への継続した服薬指導】

同じ患者に対し、継続した服薬指導をさせてもらった。

—連携—

【病院との連携が深い薬局】

普段から近隣の病院との連携が深く、合同で行われる勉強会に実習生も参加することができ、学生は地域での病院と薬局の連携を学ぶことができている。

【クリニックとの連携実習】

クリニックとの連携実習により、患者に寄り添った薬剤師を目指すことを再認識できた。

【地区で連携した合同実習】

同エリアの実習生4名と共に、保健所や、病院2か所でも実習を実施した。3つの薬剤師会合同での企画もあり、学生自身も発表を行った。学生本人が興味をもつ、地域医療（薬局がないようなへき地ではどのような対応が行われているのか）等も、先生方が色々ご説明してくださっており、学生は大変満足している様子であった。

【病薬連携による吸入指導の体験】

吸入薬の適正使用推進のために設けられた、地域連携ツールを用いた吸入指導を体験した。医師から発行される「吸入指導依頼状」に基づき吸入指導を実施、患者の理解度及び手技の評価を行い、医師への情報提供書発行にも実際に携わらせてもらった。この実習により、病薬連携による薬物治療への貢献を実感することができた。また地域限定の連携の輪が、さらに広がることが望ましいと感じた。

—他職種との関わり—

【一人の在宅患者さんに深く関わりながら実習を行った例】

実習期間中、在宅患者を担当させていただき、週1回の訪問を繰り返した。その中で、薬物療法に深く関わり、多職種とも連携し、医師への処方内容の確認や提案を行った。実習生は、頻回に患者と関わることで、患者の想いを理解し考慮しながら患者にとって最適な治療を考える重要性を学ぶことができた。

【地域医療における薬剤師の主な業務内容と多職種連携を体験できる実習施設】

地域医療における薬剤師の主な業務を体験できるだけでなく、多職種連携のためのケアカンファレンスに参加することができ、薬剤師の役割や援助の方向性を学ぶことのできた実習施設。

【在宅医療の中でのチーム医療を体験できた事例】

在宅医療の実習が大変多く、実習初日から患家、施設などの様々な在宅医療の現場を体験することができた。医師の往診に同行し必要に応じて処方提案を行うなど、他職種との連携を見ることが出来、在宅医療の中でのチーム医療を体験できた。

在宅医療で他職種との連携の様子を見て経験することで、チーム医療の中での薬剤師の立ち位置や、在宅医療での薬物治療の考え方を学ぶことができた。

【栄養指導の重要性を認識】

すべての店舗で栄養士による栄養相談が定期的に行われており、チームとして薬剤師も参加している。その中の活動として、薬剤師の薬局や在宅での服薬指導だけでなく、栄養指導の必要性を患者に説明しており、他職種連携の実態を認識することができた。

【在宅における看取り】

薬剤師、看護師、介護士などが「家族の希望により、施設内で看取り」をすることに対して、それぞれの職種が何をできるかを協議している場面に参加する機会を得た。

その中で「自分しかいないときに看取りをしても責任を感じなくていいよ。患者さんも患者さんの家族もここがいいところだからってここを選んでくれているから。不安になったら皆で連絡取り合って、一人じゃないことをわかってほしい」といった、現実の言葉と向き合うことができ、在宅での看取りへの認識、さらには薬剤師としてできることは何なのかを真剣に考えることができた。

【カンファレンスを通じた服薬指導の実践】

薬局Aは、毎週1回昼休みの時間帯に隣接するクリニックの医師とカンファレンスを行っており、実習生も同席した。医師から患者様の病態と処方意図の情報提供、薬剤師から医師へ服薬指導内容のフィードバック等で意見交換が行われ、実習生は薬物治療について理解を深めることができた。

【地域医療の現場体験を含む薬薬連携】

在宅患者へ訪問に実習生が同行する機会が多いだけでなく、他職種との連携に参加する機会を設けている。

—服薬指導—

【薬局のスタッフ全員で学生を指導する体制が整った施設】

指導薬剤師だけではなく、薬局スタッフ全員で教えてくださる環境が、学生にとって非常に暖かく、先生方のいろいろな考え方や見方を学ぶことができたようである。また服薬指導の実践の機会も十分に与えていただき（実践 50 回）、充実した実習となった。

【患者心理に配慮した服薬指導を体験できた実習】

服薬指導は伝えるべきことを伝えて終わるだけではなく、患者心理を瞬時に感じとり、心理的支援を行いながら実施することが重要であると気付くことができた。不安や不快感を与えない伝え方について、深く考察・実践できた実習であった。

【服薬指導および在宅業務体験を 100 件以上】

服薬指導や在宅業務は、実務実習でしか体験できないので、どんなレベルの学生でも、それぞれ 100 件以上の体験を心がけている。待遇が得意でない学生であったが、実習終了後の感想文に有意義な体験と成長について記載されていた。

【小児から高齢者まで様々な処方せん調剤、服薬指導の経験ができる施設】

クリニックビルにある調剤薬局であり、小児科、高齢者など様々な患者の処方せんの調剤を経験することができる。処方せん枚数も程良く、服薬指導の経験も十分にさせて頂ける薬局である。指導薬剤師を中心にその他スタッフも学生の受け入れ態勢がしっかりしており、過去にメンタル疾患を抱えている学生を 2 名受け入れて頂いた経験もある。薬局内の雰囲気も良く、学生のモチベーションを高く維持できる実習環境である。

【学生のレベルに合わせた目標設定と服薬指導体験】

まずはピッキング調剤と考える薬局が多い中、まずは服薬指導という調剤のゴールを経験させて、学生の目標設定をする。失敗を経験することでどんなレベルの学生でも、目標を立て、それに向かって行動することに繋がる。学生は辛い思いを何度も経験したが、実習終了後の感想文に有意義な体験と成長について記載されていた。

【積極的な服薬指導】

実習期間の前半より積極的に服薬指導を行うことができている。服薬指導の機会が多いことで学生は様々なことを考えることができ、高いモチベーションにつながったようである。

—指導体制および実習環境—

【実習生への迅速できめ細やかな対応】

元々対人面で不安のあった学生が、実習中に新しい環境に適応できずパニック障害を発病した。指導薬剤師が、学生に対し迅速に心療内科医を紹介し、治療を開始することができた。実習内容についても、学生の適性に合わせて調節するなど、きめ細やかな対応をしていただいた。

【それぞれの学生に合わせた実習】

同じ失敗を繰り返す学生にも根気よく対応し、学生の得意な領域でディスカッションを行い知識を充実させた。

【実習生の能力・個性に応じた指導】

事前に教員から指導薬剤師に対し、対人関係に問題のある実習生であることを情報提供し、指導計画を立てた。

教員と指導薬剤師が連携をとり根気よく、わかりやすく具体的な指示を出す、肯定的な言葉で接する等に注意し、実習を終了できた。

【実習生の能力に応じた指導】

事前に教員から指導薬剤師に対し、対人関係や体調に問題のある実習生であることを情報提供し、指導計画を立てた。

【薬局のスタッフ全員で学生を指導する体制が整った施設】

指導薬剤師だけではなく、薬局スタッフ全員で教えてくださる環境が、学生にとって非常に暖かく、先生方のいろいろな考え方や見方を学ぶことができたようである。また服薬指導の実践の機会も十分に与えていただき（実践 50 回）、充実した実習となった。

【実習環境の整った施設】

- ・ 薬剤師業務を偏りなく教育した。薬剤師達には実務実習を通して自身の業務を見つめなおす姿勢があった。
- ・ 実習生はストレスを感じることなく実習に取り組むことができたため、実習後半には自主性が高まり、それを評価してもらえる指導体制であった。

【ドラッグストア併設店の薬局。処方箋枚数も多く、実習環境の整った施設】

OTC 医薬品、介護用品、健康食品、美容製品など充実しており、セルフメディケーションについての知識を身につけることが出来る。また、様々な診療科の処方せんを調剤することができ、薬局内の雰囲気も良く、学生のモチベーションを高く維持できる実習環境である。

【実習環境の整った施設】

- ・ 毎日、異なるテーマを決めて実習を進めていただいた。
- ・ 外部の研修にもいろいろ参加させていただき、服薬指導も数多く経験し、患者さんを応対する能力も向上した。

【指導方法が優れた薬剤師】

学生より、臨床でしかわからない薬の特徴を教えていただき、印象に残りやすかったとの意見があった。

【工夫された実習内容】

指導薬剤師の先生と1：1の時間も多いが、在宅医療に同行するなどの他施設実習や処方解析のテキストを用いて実習を進めていただくなど、工夫していただいた。

【ガイドラインに基づく処方解析】

服薬指導を行った処方箋の内容について、毎回、ガイドラインに基づく処方解析を行った。同様の作業を繰り返すことで、ガイドラインの指針に従った服薬指導を実践できるようになってきた。

【応用力の育成に勤められている薬局】

丸覚えの知識のため、現場で応用が利かない状態であり、服薬指導実習の開始が遅れている。現在は、こうした考え方など、薬剤師に必要な技能の指導を行っていた。

【実習環境の整った施設】

薬剤師業務を偏りなく教育した。

【特殊疾患を持った患者さんに配慮する実習体制の整った施設】

透析センターの患者さんの処方が多い薬局で、処方せんの受け取りから交付まで時間的な余裕があるため、服薬指導前に検査データや様々な患者情報収集など、「患者さんのことを真剣に考える時間」を作ってくれたのがうれしかった。

また患者さん毎に、食物繊維が多く、カリウムの低い食品のパンフレットなどを作成させてもらい、喜んでもらえたことが心に残った。

【小児から高齢者まで様々な処方せん調剤、服薬指導の経験ができる施設】

クリニックビルにある調剤薬局であり、小児科、高齢者など様々な患者の処方せんの調剤を経験することができる。処方せん枚数も程良く、服薬指導の経験も十分にさせて頂ける薬局である。指導薬剤師を中心にその他スタッフも学生の受け入れ態勢がしっかりしており、過去にメンタル疾患を抱えている学生を2名受け入れて頂いた経験もある。薬局内の雰囲気も良く、学生のモチベーションを高く維持できる実習環境である。

【副作用情報の分析を積極的に行っている施設】

服用薬、検査値、医師の意見などから原因を分析し、患者の訴える症状が副作用であるかどうか服用薬継続可否の検討や代替治療法の提案まで実施している。薬局薬剤師が、医薬品適正使用のために、どのような役割を担うのか体験できた実習施設。

【学生のレベルに合わせた目標設定と服薬指導体験】

まずはピッキング調剤と考える薬局が多い中、まずは服薬指導という調剤のゴールを経験させて、学生の目標設定をする。失敗を経験することでどんなレベルの学生でも、目標を立て、それに向か

って行動することに繋がる。学生は辛い思いを何度も経験したが、実習終了後の感想文に有意義な体験と成長について記載されていた。

【積極的な体験型実習の実施】

麻薬の検収や帳簿への必要事項の記載など、多岐に渡り体験して学ばせていただき、さらに、OTC薬も豊富に取り扱っており、日々の実習でOTC薬を学ぶことができ、実際のお客様の対応もさせていただいた。

【服薬指導 MAP の作成と実践】

疾患別に説明および指導すべき「具体的フレーズ」を、検査値・ADL・コンプライアンス・副作用の項目に分けてMAPを作成した（高血圧、高脂血症、糖尿病）。その結果、疾患への理解が深まるとともに、服薬指導時には「患者が理解しやすい言葉」での対応が可能となり、短時間で要点を得た指導方法を身につけることができた。（主にDo処方患者を中心に延60名程度の指導）

【豊富な処方箋を経験できる薬局】

主に総合病院の処方箋を取り扱っているため、多岐にわたる調剤や処方解析を実際に行うことができている。学生も大学では学ぶことができない薬の使い方を知ることができ、興味を持って実習に取り組むことができている。

【検査値を確認した調剤の実施と地域活動・在宅実習の充実】

近隣の病院が検査値を公開していたことから、薬局でも検査値を確認して調剤を行うことができる環境であった。また、地域活動や在宅の実習にも積極的に参加させてもらえた。

【薬局の様々なバリエーションが体験できる薬局】

近隣の病院の処方箋を主に受けているようで、また在宅も行っているようで、学生はすでに同行させて頂いたようである。また川越市の集合研修が4回ほどあり、そこで学校薬剤師や漢方などの実習を行うそうです。

【豊富な研修】

薬業連携・地区（市）薬剤師会研修・府薬研修・実習薬局の本部研修 等、多くの研修に参加させて頂いた。「とても多忙だったが、充実していた」と満足している。

【地域に特徴的な疾患を多く扱っている薬局】

1人薬剤師の小規模な薬局であるが、その地方（旧産炭地）に特有の疾患、塵肺患者の処方を多く応需。学生は貴重な体験ができていた。

—報告会・発表会の実施—

【合同実習による DI・TDM 業務の深い理解】

会社（チェーン薬局）での合同実習において、薬局で実施している DI 業務や TDM 業務について意見交換や発表会など有意義な体験を通して、薬局における薬剤師の果たすべき役割について理解できた。

【地域の他の薬局との実習連携】

実習期間中に、他の薬局の薬剤師や他の薬局で実習している薬学生が集まり、症例報告や情報共有、ディスカッションをする機会があった。地域の薬局間で連携がとれており、安心して実習できた。他の薬局の実習生とディスカッションすることで、良い刺激を受けた。

【地区で連携した合同実習】

同じエリアの実習生 4 名と共に、保健所や、病院 2 か所でも実習を実施した。3 つの薬剤師会合同での企画もあり、学生自身も発表を行った。学生本人が興味をもつ、地域医療（薬局がないようなへき地ではどのような対応が行われているのか）等も、先生方が色々ご説明してくださっており、学生は大変満足している様子であった。

【薬局実習に関連した調査・研究的なテーマの策定と報告】

単独の施設ではなく、地区薬剤師会の取り組みの一つとして、薬局実習中に経験する事象から感じた疑問を発展させ、調査・研究的なテーマを各施設で策定し、データを収集し、その結果を報告している。また、実習生に課すため、指導薬剤師も普段の業務からテーマを見つけ出し、科学的・薬学的な考察を行うことの習慣付けに一役を買っている。

—患者とのコミュニケーション—

【学生による患者へのアンケート調査の実施と患者意識の把握】

薬局カウンターで実際に学生が患者に対してアンケートをとり、患者の生の意識を把握することの重要性を学ぶことができた。

【コミュニケーションスキルの大切さを体感】

患者指導を体験する中で、特に初診患者からの情報収集の難しさを実感した。指導薬剤師との話し合いでより多くの患者指導（100名程度）を希望し、何気ない会話から専門用語を避けた情報収集の術と入手した情報の保管管理の大切さを学ぶことができた。

【学生の自己紹介ポスター】

実習初日に、学生の自己紹介用のポスターを作成した。記載内容は、氏名・薬剤師を目指した理由・抱負等。実習期間中、薬局の窓口付近に展示され、患者さんに親しみを持ってもらえた。

【特殊疾患を持った患者さんに配慮する実習体制の整った施設】

透析センターの患者さんの処方が多い薬局で、処方せんの受け取りから交付まで時間的な余裕があるため、服薬指導前に検査データや様々な患者情報収集など、「患者さんのことを真剣に考える時間」を作ってくれたのがうれしかった。

また患者さん毎に、食物繊維が多く、カリウムの低い食品のパンフレットなどを作成させてもらい、喜んでもらったことが心に残った。

【患者とのコミュニケーション】

薬剤師がモノからヒトに関わる実習が実践されていた。学生は調剤や服薬指導、処方箋受付、症例検討の実習を通して処方箋から薬を見るのではなく、人を見ることを学んだ。技術や知識が必要なことに加え、患者さんの立場を考えたコミュニケーション能力、患者さんの病態を薬剤から考察していく力が薬剤師として必要だと感じました。

地域に貢献するために薬剤師の役割に関わる実習が実践されていた。学生は、実習を通して薬剤師は在宅医療や健康サポート薬局、かかりつけ薬剤師・薬局、学校薬剤師やおくすり相談会など、想像以上に多くの場面で活躍できることを知った。

—僻地医療—

【離島におけるへき地医療実習】

人口約 50 名、島の外周約 20km である B 島の診療所へフェリーを利用して指導者と共に訪ねた。診療所の院長から、B 島住民の医療の現状について説明を受け、往診へ同行し患者の居宅へ同行した。学生は、初めて体験したへき地医療の現状を知り、感銘的な刺激を得た。実習が終了した現在も休日を利用して B 島へ訪問し、1 回に 4 時間程度、院長の往診を手伝いボランティア活動を行っている。

—その他—

【副作用の評価】

患者情報から副作用の抽出に関する事例検討に加わった。

【副作用検討】

実習施設でお渡しした薬で発現した副作用の事例検討、文献調査。

【教える難しさを体験】

・学校薬剤師の役割を学ぼうえで、小学生向けに以下のテーマでプレゼンテーションする機会を得た。

- ①お薬の飲み方、注意点
- ②危険ドラッグに誘われたときの断り方指導

実験やクイズを用いつつ説明したが、対象が小学生のため教える難しさを体験した。

病院実習

—チーム医療—

【チーム医療へ参画】

手術見学、CRC 同行、NST ミーティング、リスクマネージャー会議、プロトコール審査委員会、薬品選定委員会、治験ピアレビュー、腫瘍内科・てんかん科のカンファレンス

【チーム医療への参加】

これからの薬剤師に求められている業務、チーム医療への参画、処方提案等を体験し充実した実習が受けられて学生にとって有意義な経験となった。

【実習初期からの病棟業務への関わり】

実習開始初期から病棟業務に関わり、各病棟で 1 週ずつ滞在し服薬指導を経験できる。一般病棟、小児病棟、ICU、TDM、院内製剤業務なども充実した実習を受けることができる。感染対策委員会などチーム医療への参加も経験できる。

【他の医療者への講義形式による情報提供】

剤形に関する医薬品情報をまとめて、院内に勤める看護師を対象に講義をする機会を得た。この機会を通して、他の医療者に対してわかりやすい資料を作成する意味、講義に関しての感想などを通して、チーム医療における薬剤師の役割を再認識できた。

【院内でのチーム医療】

期間中に院内感染制御チームのラウンドに参加し、その際チェックリスト評価表についての問題点（具体的には、病棟での消毒薬等の開封後使用期限未記載事例など）を抽出した。その結果を取り纏め、発表を行う機会を得た（2018 年近畿学術大会）。

【カンファレンス、回診に学生を参加させてくださる病院】

学生をカンファレンス、病棟回診に参加させてくださる。

【医師へ積極的な処方提案】

カンファレンス参加など、薬物治療について医師および看護師と話し合いのシステムあり。

【手術見学を通じての教育】

- ・全身麻酔に関して、使用する薬剤、それに関連する薬剤など効果を見せながら説明した。意識消失と筋弛緩薬投薬による身体の不動化や鎮痛作用をどの薬で得られるのかという点を説明され、薬の効果が瞬時で確認され、学生が薬の作用を再認識できた。
- ・手術に関して、代表的な血管などの臓器を見せながら、説明をすることで、学生は薬だけではなく、体全体を治療するという意識を持つことができる。

【ICU、手術室等含む全病棟での薬剤師業務の経験】

ICU や手術室を含む全病棟にサテライトがあり薬剤師が常駐している。全病棟での薬剤師業務の経験ができる。

【チーム医療の実践】

実務実習において、看護業務体験をさせていただいた。

チーム医療の実践を学ぶうえで、少しでも相手の立場に立って考えられるようになったと思う。とても良い経験となった。

【がん治療の現場を学ぶ】

手術室において大腸がんの切除術を見学させていただき、腫瘍や転移リンパ節をみることができた。その後抗がん剤の調製を体験し、患者さんの服薬指導につなげていただいた。良い経験ができた。

【糖尿病患者へ向けたシックデイ説明パンフレット作成】

- ・シックデイについて認知度が低く、患者さん本人やご家族にシックデイを知ってもらうためのパンフレットを作成した。
- ・糖尿病・代謝内科病棟の医師や看護師とも相談して作成しており、実際に使用するパンフレットに仕上げている。上記と同様、単なる調べ物の課題に留まらず、患者さんの目線で配慮した資料作りをしており、良い経験になっていると感じた。

【多職種との連携】

4年生で病院実習1を行い診療の流れを理解していることもあり、多職種と連携すべき内容を把握して積極的に多職種との関わりを持つことができていた。

実習を積み重ねることで、見学型ではなく学生が自ら実践できるようになっていると感じられた。

【他職種との積極的な交流】

手術室や麻酔科医による麻酔薬の使用方法など病棟での実習時間を多くとっており、臨床現場での経験をたくさん実習させていた。(350床)

【カンファレンス参加】

多職種参加の退院患者へのカンファレンスに参加

【チーム医療の参画】

多職種で該当症例にラウンドやカンファレンスに参加し、多職種からの意見を得ることができ、治療における意見交換の実施

【チーム医療への積極的な参加】

医師、看護師、リハビリ専門（理学療法士）等が参加する回診に参加させ、治療方針等の説明を受けながら、患者に接することによる実学を経験させている。

【病棟重視の体験型実習】

多くの診療科をラウンドさせながら、学生に受け持ち患者を持たせ、主治医の治療方針に従い、患者指導や副作用モニタリングを実施した。医療事故、医療安全の会議への出席、手術見学、CRC、MR、MSなどの講義を実施する。

【病院内の他職種との連携】

多くの学生から、「手術を見学できた」「嚥下検査に立ち会えた」「内視鏡検査に立ち会えた」「カンファレンスに参加した」等の報告があり、それにより他職種の仕事を理解することの重要性を感じ取ることができた。

【医師へ積極的な処方提案】

薬効を評価し、薬物治療について医師と話し合いのシステムあり、学生にも体験をさせていただき、薬剤師の業務を知るうえでも、大変有意義な実習となった。

【多職連携、チーム医療の実践】

薬効や副作用を客観的に評価し、薬物治療について医師や他職種とカンファで実際に話し合う機会があり、参加体験することができた。

【患者の治療全般の理解を深める実習】

薬剤師業務に関する実習に留まらず、実際の患者の手術や内視鏡検査等の見学を、関係部署の協力を仰いで行っている。学生はそのような貴重な経験をすることで、一人の患者の治療を具体的に幅広く理解することができている。

【施設一体でのサポート体制】

院長からの薬物療法に対する考え方を講義やカンファレンス・抄読会等で学ぶことができた。併せて病院でしか経験できない見学をも体験できた（手術、内視鏡、肝生検）。手術室では麻酔薬の使用量について医師から詳細な説明を受けたことで、血圧管理を踏まえた用量調節の実態がより把握できた。

【病院システムの多角的把握】

医療従事者（医師、看護師、検査技師、栄養士、ソーシャルワーカー）は無論のこと、医事課職員や物品納入業者からも業務内容を伺う機会が組み込まれており、病院のさまざまな側面に気づき、理解できるような実習計画となっている。

【ICTへの参加】

ICTの会議に参加の機会を得ることで、薬剤師が医師や看護師に対して抗菌薬の継続や中止などの意見を行っているのを見て改めて薬剤師の病院での立ち位置がしっかりしていることや立ち振る舞い方を感じ取ることが出来た。これらの経験を通して抗菌薬を使用する際には細菌の検査やそれぞれの抗菌薬のMIC濃度を確認するなど多くの判断材料から判断することが大切であることを改めて認識することができた。

—継続的な担当—

【実践的な医療接遇の体験】

病院実習において、同一の患者さんを経時的に医療接遇できた。

【同じ患者への継続した服薬指導】

同じ患者に対し、継続した服薬指導をさせてもらった。

【入院から退院まで関与による患者】

7回行った糖尿病患者への服薬指導の中で、入院から退院まで一連の流れを経験させ、その中で患者の心理と行動の変化について検討を行うことで、次の患者指導に活かしていた。

【1人の患者に対し継続的に関わった事例】

手術前の血糖コントロールでの一般病棟入院から、手術後、地域包括ケア病棟への転棟まで、計10回程度服薬指導を行い、継続的に関わった。患者を入院から手術、在宅への復帰支援まで継続的に関わる事で、短期的な治療目標や長期的な治療目標を意識しながら、処方薬や検査値などを確認し、服薬指導を行うことが出来た。

【病棟実習の反復】

同じ患者に服薬指導を繰り返し行うことで、薬の効き目や病状変化を時間軸に沿って体験できるような工夫されている。患者と顔見知りになることで緊張感がほぐれコミュニケーション技法の習熟も期待できる。

—病棟業務—

【早期からの病棟業務】

実習開始後2週目から病棟業務を経験できたので、服薬指導例も多く勉強になった。

【実習初期からの病棟業務への関わり】

実習開始初期から病棟業務に関わり、各病棟で1週ずつ滞在し服薬指導を経験できる。一般病棟、小児病棟、ICU、TDM、院内製剤業務なども充実した実習を受けることができる。感染対策委員会などチーム医療への参加も経験できる。

【全病棟での病棟業務の経験】

1週ずつ滞在し、全病棟での病棟業務の経験ができる。中小病院ではあるが産婦人科もあり、妊婦に対する服薬指導の経験もできる。

【病棟業務の適切な指導】

病棟業務を指導する薬剤師のレベルが一定しており、学生にプロブレムリストを作成させ、フォーカスを明確にして介入について指導いただいた。これにより、学生が患者に何をすべきかを理解でき、チーム医療への参画や処方提案等の体験も積極的に行い、学生にとって有意義な経験となった。

【多彩な病棟での実習と指導の質の高さ】

いろいろな病棟で学生は実習できた。また、病棟実習では担当者に手厚く指導してもらった。例えば、個々の症例の薬物治療について、薬理作用や薬物動態のメカニズムにまで深く突っ込んで考察することができた。種々の疾患において、学生は薬物療法の実践について深く理解することができた。

【学生が安心して実習できる環境】

設備が整っており、多くの科の病棟を体験でき、尊敬し得る薬剤師が指導してくれる。

【病棟活動の充実】

今年から病棟業務の時間を多くしたスケジュールにした。病棟について深く学ぶことができ様々な病棟で実習を行うことができた。全国でもほとんど行われていない薬剤師外来の見学を行うことができた。

【病棟実習の充実】

D 大学では、病院実習を病院実習 1（24 日間）と病院実習 2（3 ヶ月間）の二段階に分けて実習しており、病院実習 1 では薬剤師業務の大枠を体験する実習を、病院実習 2 では病棟業務により重点を置いて病棟における薬剤師業務を参加型実習で実施している。具体的には、病院実習 1 では 12 日間のセンター実習と 12 日間の病棟実習を実施して、薬品の管理や調製・製剤業務の基本と病棟薬剤師の役割を体験する実習としている。病院実習 2 では病院実習 1 で身に付けた臨床能力にさらに磨きをかけるために、1 病棟 4 週間の実習を 3 回繰り返す実習を実施し、内科系と外科系の病棟をバランスよく、実習計 3 病棟で実習を指導している。各病棟で、学生は自分の担当患者を割り振られ、指導薬剤師や医師の支援を受けながら、主体的に薬物治療にかかわっている。

【病棟業務の適切な指導】

病棟実習では 4 病棟を行い、各疾患について深く学んだ、患者様に対しては入院前の持参薬面談では患者様のそれぞれに自分なりの管理方法があり患者様の生活の背景を知ることが理解できた経験であった。さらに服薬指導を行うにあたっては、患者様への伝え方の重要性やポイントを絞って説明することが大切であること、患者様の理解度を確認しつつ説明をする必要があることなどを学ぶことができた。さらに入院患者様の年齢層が幅広く、それぞれの年齢層にあわせた服薬指導の難しいと感じることが分かった実習であった。

服薬指導の現場で薬剤師としての心構えとして、患者様に分かりやすく、患者様の状態を見ながら、患者様のことを思いやりながら服薬指導をしていく事を学び、臨床の現場で必要となるコミュニケーションスキルを学ぶ事ができた。

—服薬指導—

【抗がん剤調製と服薬指導】

病院でしか体験できない抗がん剤の調製を実際に行い、取り扱いの重要性など学ぶことができた。また、服薬指導は入院中に患者さんの変化が随時変わるため、変化に応じた服薬指導をしなければならないので、とても新鮮で学ぶことがとても多く、充実していた。

—地域医療—

【地域医療の現場体験を含む薬薬連携】

複数の病院・薬局で地域医療に係る実習を行った。

—連携—

【病院実習・薬局実習合同報告】

I 期に当該病院で実習を行った学生がII期の薬局実習の内容について、病院に来て発表したため、病院の指導薬剤師も薬局実習修了後の学生の成長ぶりを知ることができた。

【退院時共同指導とかかりつけ薬局の薬剤師との連携の体験】

退院時共同指導に、病棟薬剤師と同席し、参加しているかかりつけ薬局の薬剤師との連携を体験することができた。

【患者退院時の治療継続を保証する地域医療機関とのシームレスな薬薬連携】

病院薬剤部と患者居住地域を管轄する県薬剤師会支部会が連携できる仕組みが構築されており、患者退院にあわせて、病院薬剤師と保険薬局薬剤師が患者情報を共有している。また、こうした情報共有の場面を実習生が見学並びに立ち合いができるよう、実習指導計画が組まれている。

【薬薬合同実習報告会の実施】

実習終盤に行う実習報告会に、平成27年度から周辺地域の薬局指導薬剤師を招き、平成28年度は薬局実習生も一緒に発表を行う体制を取り、平成29年度1期もそれを継続できている。2期3期は、1期にC病院で実習を行った学生と薬局実習先の指導薬剤師を中心に声掛けを予定している。

—グループ実習—

【他病院の見学】

他病院の見学についても、病院・診療科の特徴・特色・運用など、大きく違い、とても勉強になったと学生に好評価を得た。

【急性期と地域医療の両方が体験できる実習】

急性期の病院、地域医療が体験できる分院など、複数の病院で実習を行い、医療に関わる薬剤師の職能について広く体験させていただいた。

【複数施設を体験】

診療機能の形態が異なる施設（重症心身障害児（者）医療・H I V治療）を見学できたことで、セーフティーネット系政策医療分野の実態を理解することができた。

【複数施設を体験】

主幹病院が中心となり、慢性期、精神科、在宅を主体とする病院との連携実習を実施し、実習内容の充実がはかられている。

【複数の病院での連携実習】

系列病院や実習提携病院での実習があり、急性期から慢性期までの実習が経験でき有意義だった。

【施設間の規則・作法の多様性の経験】

自施設以外に、複数の病院における実習を行うことで、調剤規則や病棟活動の実施方法に施設間で差異があることを知り、さらにそれぞれの長所短所を考えさせ得るように、実習受け入れ体制が整備されている。

【SGD】

自施設に受け入れている学生のみでは SGD の実施が難しい場合は、幾つかの病院が連携して SGD を開催している。さらに同じテーマでも各施設の特色を反映して、多様な意見が出るのが図られている。

【グループ実習による充実した SBO 実施】

チェーン薬局を組み合わせ、従となる施設を利用して実習内容を充実させた

- A 主施設：SBO 全般と生活習慣病の服薬指導
- B 従施設：在宅訪問へ同行した。
- C 従施設：刻み生薬の漢方薬調剤と漢方医から漢方処方基礎について講義を受けた
- D 従施設：簡易検査室を備えている薬局で、採血、機器操作を体験した。

—指導体制および実習環境—

【実務実習担当専従薬剤師配置】

実務実習専従薬剤師4～5名配置されており、きめの細かい、充実した指導が受けられた。

【障害のある学生に対応する実習】

学生に細かい配慮がなされ、病棟実習では指導薬剤師による高度な知識や技能に関する指導が行われている。

【学生が安心して実習できる環境】

設備が整っており、多くの科の病棟を体験でき、尊敬し得る薬剤師が指導してくれる。

【ストレスのない環境】

職員間の人間関係が良い、自習スペースや休憩場所がある、等により、実習生は実習に集中して取り組むことができた。

【指導体制および実習環境】

最新の医療と充実した実習内容。卒業生の薬剤師が多く、親切に判りやすく指導していただける。学生の満足度が高い。

【本学卒の先輩薬剤師】

本学から初めて実習生がお世話になる病院であったが、本学卒の先輩薬剤師が4名奉職していて、実習生は先輩方の支援もあり、より充実した実習を送れた。

【指導体制および実習環境】

多くの薬剤師が関わり、指導体制がしっかりしている。

【きめ細やかな学生対応】

コミュニケーションが不得手な学生。積極的に声かけをしてくださったり、学生が苦手とする話題には触れないようにしてくださったり、学生が自信をもって実習に参加し続けられるように、薬剤部全体で取り組んで下さった。

【実習生の能力・個性に応じた指導】

事前に教員から指導薬剤師に対し、対人関係に問題のある実習生であることを情報提供し、指導計画を立てた。

【実習内容に対する柔軟性】

実習初日に何がしたいかを問われ、希望の実習を重点的にさせてもらった。

【学生の積極性を引き出す実習】

実習の事前挨拶時から『学生の積極的な実習態度』『学生の自発的な発言（質問）』を明言された。疑問に思ったこと・分からない事は、どんどん質問する。質問が無ければ、理解できていると判断し“教えない”。学生は毎日積極的に実習に取り組むことができた。

【指導体制および実習環境】

指導薬剤師は日常業務をしながらも、学生を指導する意義を認識し、病棟実習では一人の学生につき一人の指導薬剤師が手厚い指導を行い、様々な症例を経験できた。

【きめ細かいフィードバック】

実務実習指導薬剤師および担当薬剤師が学生の日誌の記載に対して、多くのフィードバックをしてくれる。薬剤師から応援されていることが、学生のモチベーションになり自信を持つようになった。

【きめ細やかな実習日誌】

実習日誌は、学生が毎日紙ベースで記載した後、担当の先生方から赤ペン指導・指摘をいただくことができ、とても勉強になった。

【実習スケジュール・目標が明確】

- ・行うべき実習内容が理解しやすかった施設
- ・カリキュラムが細かく組まれていつ何を行うのかを理解して実務実習を行えた。指導の際、プリントやパワーポイントの資料が用意されていて説明を理解しやすかった。

【実習環境の整った施設】

- ・薬剤師業務を偏りなく教育した。特に、音声案内を利用した抗がん薬注射剤の無菌調製システムなどリスクマネジメントを目的とした取り組みも体験できた。
- ・実習生はストレスを感じることなく実習に取り組むことができたため、実習後半には自主性が高まり、それを評価してもらえる指導体制であった。

【学生のケア、現場の薬剤師も教育者、症例報告会】

現場の薬剤師が教育者であるという自覚を持ち、毎週、学生と指導薬剤師が面談を行うことで、実習の進捗状況、理解度、指導薬剤師との関係性などを確認し、学生のケアを手厚く行っている。実務実習の総まとめとして、関わった患者の症例報告会を実施。薬剤部の薬剤師が総出で参加しており、非常に活気のある議論が交わされた。

【実習環境の整った施設】

実習ユニット毎に学生が相互発表を行うなど知識の共有化にも配慮され、薬剤師業務を偏りなく修得できる教育システムがある。

【EBM 演習】

薬剤師と教員（統計の専門家）が論文の批判的吟味について教育している。これからの薬剤師にとって重要な能力であり、良い経験になっていると感じた。

【病院薬剤部における在宅医療への関わり、実習初期からの病棟業務への関わり】

病院での在宅医療業務を実施しており同行することが出来、貴重な経験が出来る。また、実習開始初期から病棟業務に関わり、第4週目位から実際に服薬指導を経験できる。一般病棟、療養病棟と様々な患者さんに触れ合うことができ、充実した実務実習が受けられる。

【薬剤師として多角的な視野を得られる教育プログラムの提供】

医療倫理に基づく行動についてSGDを行い、薬物療法を実践していく上で必要な態度について理解を深める教育をおこなっていた。

【持参薬への積極的な関与】

薬剤部が持参薬に積極的に関与しており、多くの持参薬を検討し、中止後の提案を積極的に行っており、実習生にも参加させ、考える実習を行っていた。(198床)

【病棟、外来化学療法実習と、タブレットを用いた調剤監査システムによる実習】

学生1人に2病棟で薬剤管理指導実習さらに外来化学療法患者指導実習を行っており、継続した患者モニタリングや患者指導を行うことができた。また、タブレットを用いた調剤監査システムを用いており、学生が関わる調剤においても調剤ミスはほとんど0%であった。

【新コア対応を意識した実践的な実習】

- ・ IPE のシミュレーション
- ・ 個人 ID 管理の電子カルテを利用した実践的な病棟実習
- ・ 8 疾患を意識した病棟実習
 - ・ 薬効を評価し、薬物治療について指導薬剤師と話し合い、それを医師に提案する。

【ポートフォリオによる目標設定とルーブリック評価】

日々の目標設定と振り返りについてポートフォリオを用いて行っていたが、指導薬剤師からコメントを受けながら目標を達成しているように感じられた。

またルーブリック評価を各病棟の2週目と4週目に実施したが、学生自身がどこまで到達でき、次のステップには何が必要かが明確になり、指導薬剤師側もアドバイスしやすかったと思われる。

【電子カルテへの記録】

病棟実習で実施した持参薬チェックや患者面談の内容を実際に電カルに記載しており、体験することができた。

【実習生のための実習プログラム】

約3年ぶりの実習生の受入れであり、実習生も本学の学生1名であったこともあり、当初の実習計画をベースにしつつ、学生に合わせてスケジュールを変更していただいたり、近隣他県との県境に位置する診療所へ同行させていただいたり、当初予定になかった実習成果発表会をしていただいた。

【急性期、慢性期を網羅する病院連携実習】

患者の病態を広く学習することができた。

【実習環境の整った施設】

病棟実習中に経験する症例の偏りを補う教育を行っている。

病棟実習中（約 6 週間）、週 1 回実習中の学生が集まり、症例検討会を実施。現在担当している患者の病態や薬物療法、薬剤師の介入等を報告し、質疑応答により互いの経験を共有する機会を設けている。検討会には薬学部所属の実務家教員が参加し、学生の理解不十分な点や今後モニタリングが必要な項目等について直接指導を行っている。

薬物療法の評価・実践のプロセスを深く学習するとともに、他の学生が経験した症例の共有が可能となるため、実習中の経験の偏りを補うことができる実習環境となっている。

【再診患者の場合の積極的な処方介入】

医師の許可のもと、再診患者に対し処方薬が期待通りの効果を示しているか否かを薬剤師が判断し、処方の継続・変更を医師に提案するシステムが構築されている。実務実習生も習熟の程度に応じて、これに参画できるよう、実習指導計画が組まれている。

【実習環境の整った施設】

ポリクリ実習では、診療科ローテーションで、個別症例に対する対応力を培うための教育が行われており、学生の意識の向上が認められた(処方提案、副作用対応など)。また、多職種によるチーム医療を体験することができたことも教育効果が高かった。さらに、次コアカリの対象となる 8 疾患が網羅されているため、将来の実習をシミュレーションすることができた。

【多職種連携を見学する機会の多い病院】

ICT, NST, 心臓リハビリなど多職種連携を見学する機会があり、また、抗がん剤のレジメンの作成など難易度が高いが、病院薬剤師の業務を体験する機会があり、体験型のプログラムになっていた。

—報告会・発表会の実施—

【学生カンファレンス】

各病棟でのまとめとして担当患者のサマリーをもとに大学教員、指導薬剤師、多職種を含めたカンファレンスを実施したが、患者の病態や現在の治療方針について学生自ら主治医と積極的にコミュニケーションをとることで十分理解しており、その上で患者との関わりを実践していることが伺える内容の発表もあった。

【院内の症例検討】

自身が実務実習を通して関わった症例発表。

【薬業合同実習報告会の実施】

実習終盤に行う実習報告会に、平成 27 年度から周辺地域の薬局指導薬剤師を招き、平成 28 年度は薬局実習生も一緒に発表を行う体制を取り、平成 29 年度 1 期もそれを継続できている。2 期 3 期は、1 期に C 病院で実習を行った学生と薬局実習先の指導薬剤師を中心に声掛けを予定している。

【病院実習・薬局実習合同報告】

I 期に当該病院で実習を行った学生が II 期の薬局実習の内容について、病院に来て発表したため、病院の指導薬剤師も薬局実習修了後の学生の成長ぶりを知ることができた。

【学生にプレゼンテーションの機会を複数与える病院】

実習中は病態に関する発表 1 回、症例発表 1 回を経験しており、残りの期間で症例発表 1 回が予定されており、プレゼンの機会が充実していた。

【院内でのチーム医療】

期間中に院内感染制御チームのラウンドに参加し、その際チェックリスト評価表についての問題点（具体的には、病棟での消毒薬等の開封後使用期限未記載事例など）を抽出した。その結果を取り纏め、発表を行う機会を得た（2018 年近畿学術大会）。

【学生のケア、現場の薬剤師も教育者、症例報告会】

現場の薬剤師が教育者であるという自覚を持ち、毎週、学生と指導薬剤師が面談を行うことで、実習の進捗状況、理解度、指導薬剤師との関係性などを確認し、学生のケアを手厚く行っている。実務実習の総まとめとして、関わった患者の症例報告会を実施。薬剤部の薬剤師が総出で参加しており、非常に活気のある議論が交わされた。

—患者とのコミュニケーション—

【患者コミュニケーション】

患者面談についてはほとんどの学生がスムーズに実施することができていた。病院実習1では見学する機会が多かったが、本実習においては言葉遣いや患者との目線など十分配慮することができていた。

【患者のことを考えた業務】

患者さん一人一人のことを考えた業務が行われていたこと。

薬剤の処方間違いの確認や副作用の確認だけではなく、薬剤の使い心地、不明・不安な点など、患者さんに対して親身になって話を聴くといったことを行うその実例を学ぶことが出来た。

【患者さんからの言葉】

病棟実習へ行った時、「頑張って勉強して、いい薬剤師さんになってね」と患者さんから声をかけて頂いたことがあり、とても嬉しく励みになった。学校での講義も学ぶ事が多いが、病院での毎日は全てが学びであり、貴重な体験となった。

【患者グループへの参加】

院内において、統合失調症の患者を中心としたグループディスカッションに定期的に参加することで、薬物を中心とした治療だけでなく「患者より語られる治療」を経験することができた。この経験を通して、患者中心の医療に対する認識が深まった。

—僻地医療—

【診療船巡回による離島医療】

病院Aは診療船を所有しており、実習期間中に最寄りの港から出航する機会があったため、指導薬剤師と一緒に乗船した。診療船の設備及び医療者と島の住民との交流を通じて、へき地医療は山間部だけでなく、瀬戸内地方の至るところで必要とされている現状を体験することができた。

—その他—

【ドーピングの問い合わせ対応業務フローマニュアル作成】

- ・2020年のオリンピックに向けて、スポーツファーマシストはますます需要は高まると考えられる。本施設ではスポーツファーマシストの認定薬剤師が在職しているが、夜間の問い合わせなどですべての薬剤師が対応出来るようマニュアルを作成していた。
- ・実際の業務で活用出来るものを作成しており、完成度が高かった。実習生に対して単純な知識習得や経験を積ませるにとどまらず、実際の業務に落とし込むレベルで作品を作る作業は様々な面で良い経験となっていると感じた。

【院内マニュアル改訂への関与】

院内製剤マニュアル、麻薬廃棄マニュアル、抗がん剤取扱いマニュアル等の改訂作業に指導薬剤師とともに積極的に関与した。採用薬・医療機器の調査および院内ルールの確認等、何を調べたら答えが導き出せるかを自分で考えるという能動的なアプローチについて学ぶ良い経験となった。

【病理解剖の見学】【医薬品安全性情報の報告実習】【簡易懸濁法の利便性の体験】

- ・動脈瘤や胆石、腎臓結石が実際にどのようなものであるか理解するため、病理解剖見学が組み込まれている。
- ・実習中に経験した副作用事例を医薬品安全性情報として整理し、指導薬剤師の監督の下 PMDA に FAX で連絡するところまで実習している。
- ・簡易懸濁法の利便性に対する理解を深める目的で、簡易懸濁法による胃ろう患者への投薬立ち会いが組み込まれている。

【アドヒアランスの改善への取り組み】

閉塞性動脈硬化症（ASO）の患者に対してアドヒアランスの改善に「説明資料」を作成する機会を得た。少し気難しい部分がある患者さんとの面談を繰り返しながら、当初は「この説明はわからん」から最後は「これならよくわかる」といった言葉を当事者から得ることでできた。この過程で、患者と関わること、言葉に耳を傾けることの重要性を理解できたばかりではなく、真剣に取り組むことで、患者さんの喜び、そして医療人の達成感に繋がることを認識できた実習と考えられる。

【学会等への参加により、学生のモチベーション向上】

平成 29 年 7 月 8-9 日に鹿児島市で開催された日本薬学会医療薬科学部会主催 医療薬学フォーラム 2017 に病院薬剤師会のご厚意（参加料負担）で、鹿児島県下で病院実習している学生は、無料で学会に参加できた。指導者側のコメントに、薬剤師が実際に参加している学会に参加して学生の意欲が向上した旨の記載があった。また、学生の週報にもこのことが散見され、薬剤師としての研究や生涯研修、様々な取り組みを実感できたように思われた。

【MR の職能の学習の機会を設けてくださっている病院】

学生の将来の職業選択の為に、病院薬剤師の仕事の学習の機会のみでなく、MR の方の話の場を設けてくださり、MR の職能の学習の機会を設けてくださっていた。

【麻薬処方箋の調剤】

特別な管理を要する医薬品の取扱いの習熟を目的に、麻薬や向精神薬の調剤が実習に組み込まれている。

【問題点発見と解決方法の意識を持った実習への取り組み】

服薬指導を担当した患者に、ニカルジピン注射薬投与による静脈炎の副作用が発症した。学生は、本剤の液性が pH3-4 と酸性のため、使用する輸液の種類、希釈率、投与速度などに副作用発現が影響されると考えた。指導薬剤師と相談し、過去に本剤を投与された患者について電子カルテを調査したところ、輸液の希釈率、投与速度に規則性がないことがわかった。そこで、本剤の静脈炎発症の予防に有効な輸液の種類、希釈率、投与速度を調査し、その結果について病棟スタッフへ説明する機会を作っていた。